

# 博士論文の要旨

氏 名 今井 彬暁

論文題目 ベトナムのモンの二元論における諸存在の制作と構成—「常世」と「現世」の  
関係に着目して—

本研究の目的は、ベトナムの山岳少数民族であるモンを研究対象とし、モンが、彼らを取り巻く可視の物的存在（以下、「物体」）および不可視の霊的存在（以下、「霊体」）との関係の中で、いかにして彼らに身近な諸存在をつくり上げているのかを明らかにした上で、そうした諸存在との関係においてモンの行為や説明に理解を与えることである。モンの世界は、ダン（以下、「霊」）やプリー（以下、「魂」）といった霊体が充溢する世界である。モンは、それら霊体を物体と組み合わせることにより、人、家、祖先、作物をはじめとする、彼らに身近な諸存在をつくり上げる。そのようにしてつくられた諸存在は、常世と現世の二元論に基礎づけられており、本研究は、研究の前提をモン自身の二元論にまで掘り下げることにより、霊体および物体に対するモンの行為や説明への深い理解をもたらす。

序章では、本研究の方法として、研究目的を達成するための 2 つの手続きを提示する。第 1 の手続きとして、調査対象であるモンの行為やそれについての彼らの説明を疑うことなくそのままに受け取り、認めることを出発点とする。この方法を実行すると、しばしば、人々の行為や説明に、研究者から見て論理的な矛盾や道義的な問題が浮上する。例えば、霊や魂をめぐる人々の説明が因果関係を無視しているように思われたり、人間の生命に対する人々の行為に道義的な問題があるように見えたりする。そうしたとき、本研究は第 2 の手続きとして、彼らを疑う代わりに、研究者自身が拠って立つ前提に疑いの目を向ける。彼らの行為や説明を受容する過程の中で、研究者自身が普遍的だと考える前提を批判的に検討し、その前提を相対化するのである。これら 2 つの手続きを、文化の表象の水準においてではなく、存在論の水準にまで立ち返りながら進めることにより、調査対象の人々の前提に基づきながら彼らの行為や説明に理解を与えるのである。

2 章では、人類学理論における本研究の方法の位置づけを示す。本研究は人類学の「存在論的転回」を踏まえながら、モンの霊や魂を、文化の表象の産物としてではなく、人々とのあいだの関係の中に現れる現実の一部として捉える方法論をとる。

3 章は、モンの生者に関して記述し分析する。生者のカテゴリーとして、子ども、嫁、世帯主、シャーマン、病人を取り上げる。モンの生者が、物体である身体と霊体である魂との結びつきの結果として生起すること、また、そうして生起した個人が、現世の社会関係のみならず、常世の諸存在との関係の中で、それぞれの社会的位置づけを賦与されることが明らかになる。最後に、病人に対するシャーマンの治癒儀礼に着目し、治癒儀礼が病人の身体に対する直接的な働きかけを伴わないにもかかわらず、儀礼の遂行が病気の治癒に結実するのはなぜなのか、そのメカニズムを明らかにする。

4 章は、モンの死者を取り上げ、それが生者といかなる関係を結んでいるのかを明らかにする。一連の葬送儀礼を分析し、その各段階においてモンが特定の霊体を操作し、身体

以外の特定の物体と結合することで、生者にとっての親和的な死者を制作する過程を描出する。それにより、モンの生者が魂と身体の複合体であるのに対して、死者は霊または魂と人工物の複合体であることを示す。加えて、モンの家もまた、家屋と家霊の複合体であることを描き出す。それらの議論を踏まえて、死者である祖先がいかんにして生者である子孫に影響を及ぼすのかを示す。

5章は、モンの親族集団が形成される過程を描く中で、そうした親族集団がいかなるつながりに基づき構成されているのかを考察する。モンの個人は、生まれ落ちたときから、親族関係のネットワークの中に位置づけられる。各人は、そのようにして与えられた関係の中で成長し、さらに婚姻、出産、養取を通して親族関係を紡いでいく。そうした人間相互の関係は、家や祖先といった人間以外の他存在との関係に依拠して区切られることで、親族集団としての境界を与えられる。このように、モンの親族集団は、人間相互の関係を規定すると同時に、人間以外の諸存在との関係に基づいて規定される集団でもある。本章の最後では、未婚のまま身ごもった娘がいかんにして親族により殺害されたのかについて、その殺害方法の検討などを通して、モンの親族の紐帯の基盤を描き出す。

6章は、モンの贈与についての分析を通して、モンの様々な生産や交換が、祖先と子孫とのあいだの互酬的關係に基礎づけられていることを明らかにする。まず、モンの農業生産を描写し、生者間の関係のみに基づいて達成されているように見えるモンの農業生産が、実は祖先と子孫とのあいだの互酬的關係に支えられていることを、祖先祭祀の描写に基づき明らかにする。さらに、そうした祖先と子孫のあいだの關係が、農業生産にとどまらず、モンの生活全体に影響を及ぼしていることを、旧正月の祖先祭祀の描写に基づき明らかにする。最後に、モンの飲酒慣行を取り上げ、死の危険を伴う大量の飲酒がモンのあいだで維持され、推奨される時、そのような飲酒慣行はいかなる道徳的基盤に支えられているのかについて考察する。

7章では、3章から6章までの議論をまとめながら、本研究の結論を提示する。本研究の結論は、以下の2点である。第1に、本研究は、研究者に対しては論理的な矛盾をはらむように映るモンの行為や説明が、モン自身が依拠する常世と現世の二元論の中では因果関係を伴って現れることを、モンの儀礼の分析に基づき例証した。モンの二元論に基礎づけられた現実においては、因果関係は常世（霊体）と現世（物体）とのあいだで作用するため、モンの儀礼を自然（物体）と文化（精神）の二元論に基づいて理解しようとする、論理的な矛盾に陥ってしまうのである。第2に、本研究は、常世と現世の二元論が、モンの諸行為に道徳的な基盤を与えることを示した。死後も常世で魂として存在し続けるモンにとって、自身が死んだとき、自身を弔い祀る親族が不可欠となる。故人に対する儀礼は、儀礼の形式を共有する親族集団によって担われるため、親族の紐帯を良好に保つことは、親族が協力して儀礼を遂行するための必須の条件である。モンにとって最も避けるべき事態の1つは、死後に正しく弔われないことであるため、モンは、時として個人の生命を犠牲にしても、親族関係を良好に保つことを重視するのである。

本研究は、以上のようなモンの常世と現世の二元論を、自然と文化の二元論と対比しながら説明した。後者においては、霊や魂といった超自然的存在は文化の表象の産物とされ、実在とは見なされない。これに対して、モンの二元論では、自然と文化はともに現世の領域に位置づけられ、さらにその外側に広がる常世の領域に魂や霊が実在している。現在の

科学は、こうした常世の領域が実在するか否かを証明し得ない以上、常世の存在を前提するか否かは、選択の問題でしかない。モンは常世があることを前提して諸存在をつくり上げるため、常世がないと前提する人々とのあいだには、存在論的な差異が生じるのである。本研究は、モンの行為や説明を、こうした存在論的な差異を踏まえて理解しようとする試みである。